

韓国太白山周辺の得水法による風水景観 —韓国農村集落における風水景観に関する研究 その12—

正会員 ○山口 泰佑^{*1} 同 佐藤 誠治^{*2} 同 小林 祐司^{*3}
同 姫野 由香^{*4} 同 樋口 夏希^{*1} 準会員 野村 優太^{*5}

7. 都市計画 — 6. 景観と都市設計 c. 景観イメージ・景観評価
韓国 風水 景観 集落

1. はじめに

その10での地形構造分析を踏まえ、その12では韓国北部太白山周辺地域の非常に特徴的な河川環境に影響を受け、特に得水法とかかわりが深いと思われる風水集落の景観を分析する。その10でこれらの集落の地形構造的な特徴についての分析・考察を進め、地形構造的に大きく5つに分類することができたが、河川の規模が非常に大きいため分水合水地点が集落内外から確認しづらく、実際に現地調査で撮影した写真への映り込みも少なかったため景観の特徴としては玉帯型と大きな差がないと判

断し、本稿では特に玉帯開放型・玉帯閉鎖型・蔵風得水型の3つに絞って景観の考察を進めることとした。

2. 各分類の景観的特徴

ここでは分類ごとの景観的特徴を実写真と線画を用いて考察する。線画に関しては昨年度までの研究^{*1~9}と同様に景観要素が紙面上で認識しやすいように作成した。また、得水法の風水景観では特に河川と集落の関係性が重要であると考えられるため、集落周辺の河川と後方の山々を含めた最も全貌を把握できる撮影ポイントである対岸（朱雀方向）から集落を見渡せるもので統一した。

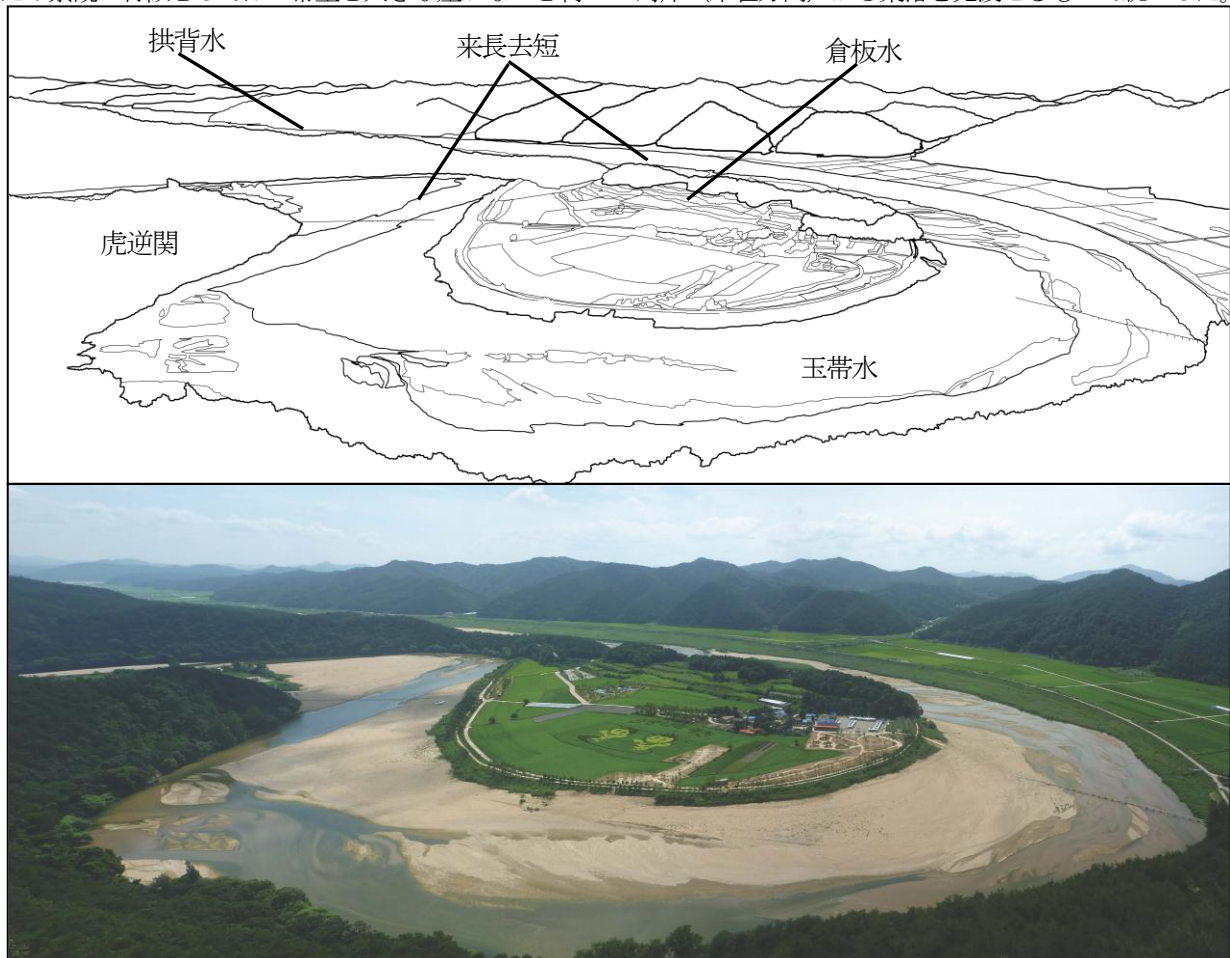


図1 玉帯・閉鎖型 テウンマウル

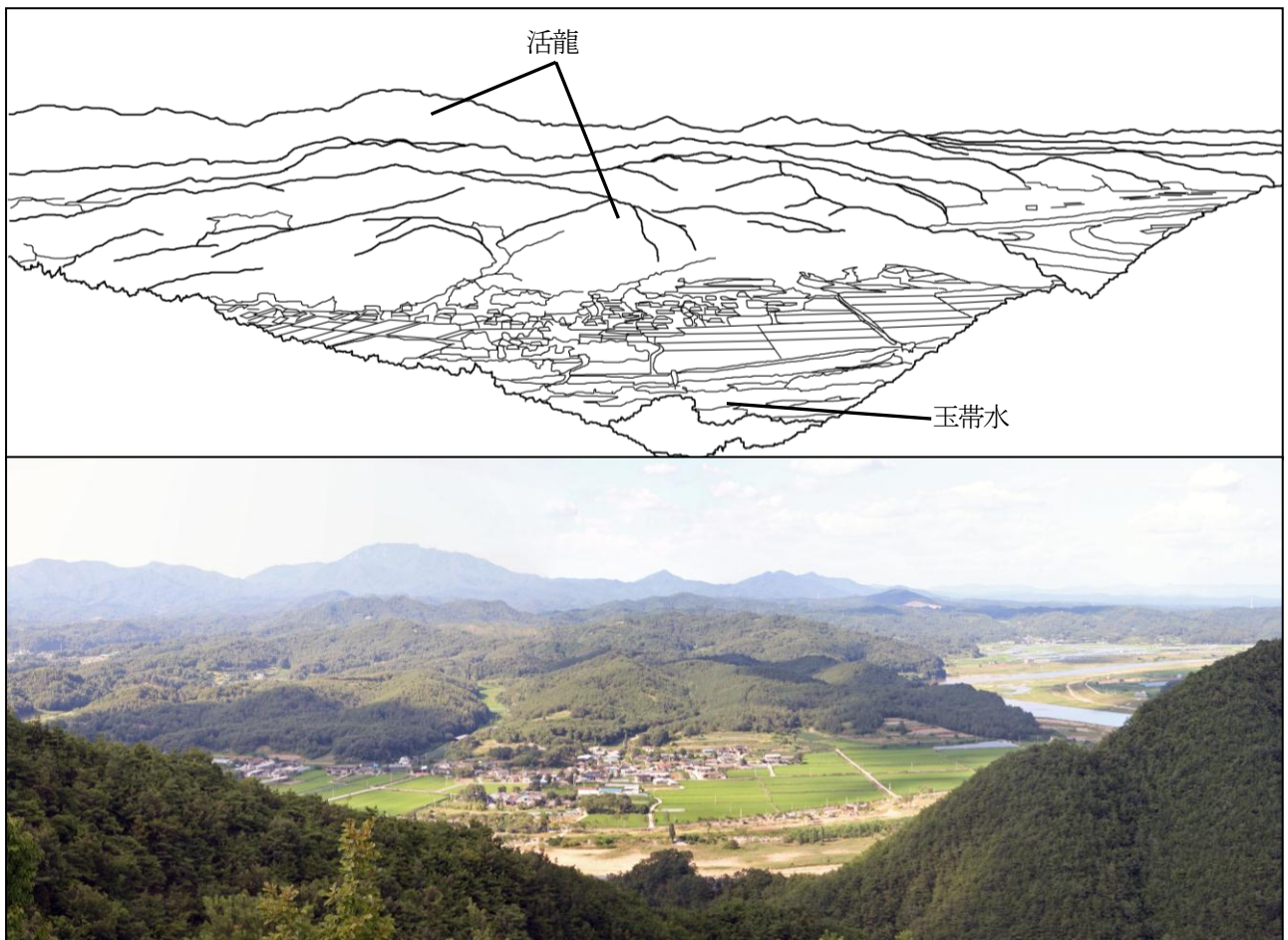


図2 玉帯・開放型 マエマウル

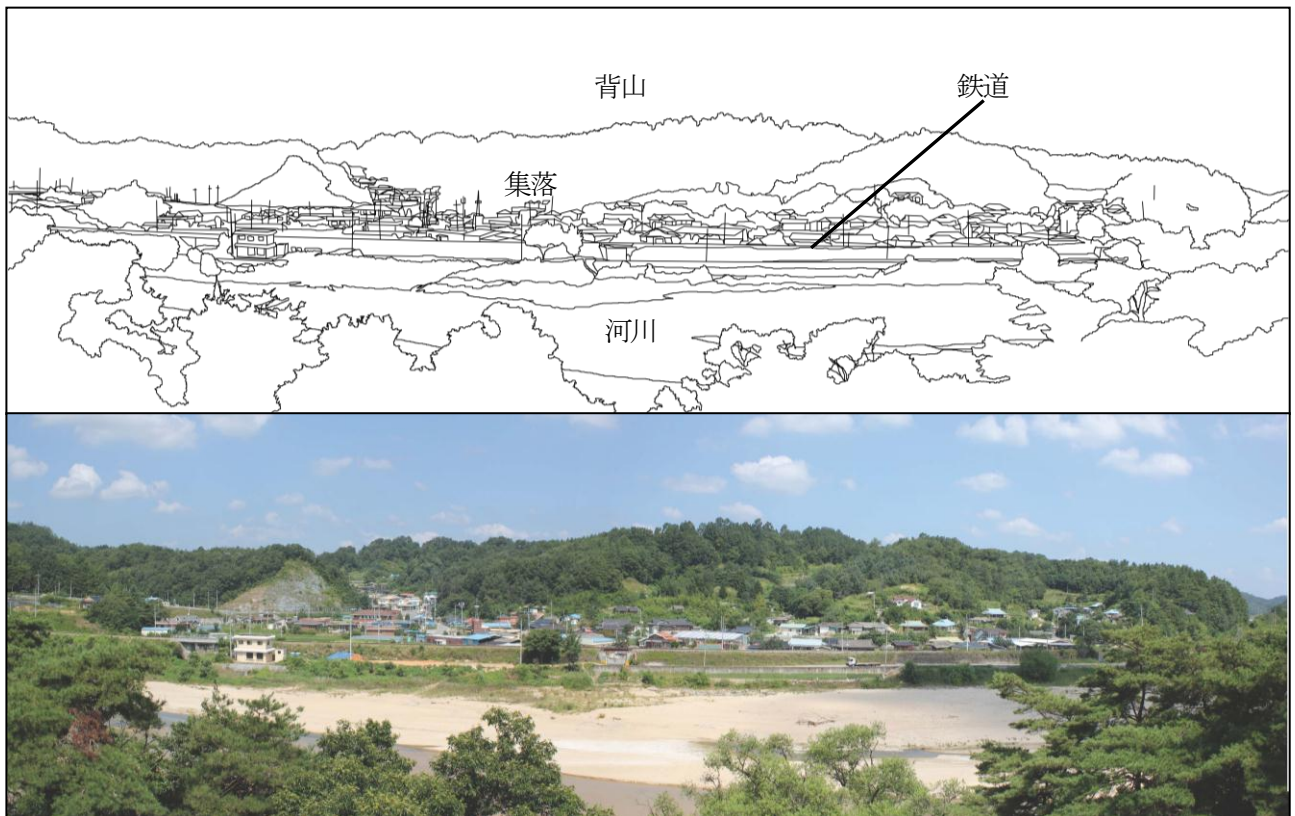


図3 蔵風得水型 ミホリマウル

2-1 玉帯・閉鎖型

本年度の調査では特に事前調査の段階から川がうねって集落を取り囲んでいるものに注目していたが、それを顕著に示すのがこの玉帯・閉鎖型のグループであった。

まず特筆すべき点はこのテウンマウルの玄武方向の尾根筋にはこの集落を視対象として見る視点場が整備されており観光地化している点である。このことからこの集落が景観的に他の農村集落とは一線を画していることが伺える。このように集落の川の対岸に視点場が明確に存在していた集落はこのほかにスドマウル・チョゼマウル・シンウォルマウル・サムガンマウル・ハエマウル・マエマウル・トチョンマウル・ドウサンソウン・ミホリマウルがあり、特に観光地化していたのはテウンマウル・ハエマウル・スドマウルであった。この観光地化した3つの集落がすべて玉帯・閉鎖型に分類されることにも注目したい。この集落立地においてどのような風水理論が用いられ景観といかに関わりがあるか図1を用いて考察を進める。

最も特徴的なものはやはり玉帯水の理論だろう。集落を周辺から隔離するように河川が取り囲み集落が特別な存在であるかのような独特な景観を作り出している。玉帯水には河川の形状によって水星水城や金星水城のように分けられるがここでは一概に玉帯水とする。玉帯水と同様に川に関する理論として来長去短と拱背水があげられる。来長去短とは集落に入ってくる水（来水）が集落から出ていく水（去水）よりも長く直線的であるほうがよいとされる理論であるが、この集落ではその様子が顕著に見てとれる。また、拱背水は来水が集落の後方から集落を巻き込むように流れてくるのがよいとされる理論であり、この理論にも当てはまっている。これらの2つの理論によって単に玉帯水で集落を河川が取り囲むだけでなく、景観に強弱をつけ見る方向によって違った姿を演出するようになる。また、山に関する理論に虎逆関・倉板水がある。虎逆関とは青龍側から集落を回りこんできた来水を白虎側の山が受け止めるように突き出ている状態をいう。この写真ではまさにその形状がはっきりと映し出されている。これによって風水ではよい気が留まり集落に流れるとされるが、集落後方の主山と合わせてまるで山々が渦巻いて集落を包み込むような独特の景観を作り出している。倉板水とは集落後方の主山から集落に至るまでの斜面において集落に水が流れ込むように水

田や川があるとよいとされる理論だがこの集落でも顕著ではないが確認できる。これによって山からすぐに集落の境界がある時よりも薄い緑を一層はさむことで色彩の連続的な変化を生み出す効果がある。

2-2 玉帯・開放型

ここでは玉帯・開放型について論ずる（図2 マエマウル）玉帯・閉鎖型と同じく集落は河川に囲繞される特徴的な立地をしているが特に閉鎖型と異なる点はその後方の山々にある。閉鎖型では拱背水の影響を受け集落の主山方向の山は細長く巻き込んでくるような形状であったが開放型では主山方向の山は左右に広がりを見せ、力強い印象を受ける。この写真においては集落が河川に取り囲まれている姿は確認しづらいが、後方の山々が広く長く伸びており、活龍と呼ばれる山々が単純な形ではなくまるで龍が生きて動き回るかのように躍動的である姿が確認できる。これら玉帯・開放型の集落は集落後方の山から集落の平野部が突き出るように伸び、河川に取り囲まれるためその平野部が広く、比較的周囲を見渡せるような地形構造にある。

2-3 蔵風得水型

最後に、集落は河川と山々の間に立地するがこれまでの玉帯型とは異なり河川が集落を取り囲んでいないのが蔵風得水型である（図3 ミホリマウル）。本年度の調査ではこのグループに属する集落はあまり多くなかったが、その地形構造から明らかに異質であり、その景観も玉帯型とは異なっている。まず大きく違うのは河川と集落の距離である。玉帯型では集落と河川が同レベルに存在し傾斜もほとんどないため距離があるが、蔵風得水の集落では集落自体が傾斜面にあり川より高い位置にあるため川との距離が近くなる。このことで集落を対岸からほぼ水平に見ても山・集落・川の関係が一目で確認できる。これは写真でみても明白である。また、蔵風得水の集落では河川は集落と並行して流れているのだがそれは集落前方に鉄道が走っていることから読み取れる。玉帯型ほどの強い特徴があるわけではないが、集落が山と川に挟まれ自然豊かな様子が見て取れる。

3. 得水法の集落景観と住民意識

以上のような風水景観の考察を踏まえて現地調査でのヒアリング結果（表1）をもとに韓国の農村集落の住民と文化が風水景観とどのようなかわりを持つかについて考察を行う。

集落 記号	集落名	対 象 年	山の名前				川の名前	風水認 知 有 無		風水を感じるもの 昔は川がとてよかった 寺が川側にある	川・山どちら の関わりを意 識するか	生業による 風水の意識か	太白山と の関わりを 意識	禪補について	形周について	墓を造る場所	川の対岸	系 の家	開発による 景観を感じるか	その他	
			玄武	白虎	朱雀	青龍															
A	クムグァン里	20	クァンダン				乃城川	6	6		山	生業	しない	-	牛が寝ている形	対岸側	ダム		感じる	ダム開発が嫌だから引越したい 川の形が太極図になっている。ものすごくきれい。この村の名前となっている。	
B	スト里	11	ビルバル山			南山	ネンンチョン	2	0		山	風水	する	-	集落名	-	-		感じない	太白山と小白山の両方を意識している 川を流れていく。ヨソで一番有名な山より、川に囲まれていることを強く意識	
C	チョゼ里	11	ノコル	ダンコル	サム ジコル	チョル コル	ネンンチョン	2	0		山	風水	しない	-	昔の集落名	-	設置(昔は 寺もあった が)		感じない	テペクより、ハツカ山の影響を強く感じる 山に囲まれているから災害がよい。安定している	
D	ソウォル里	11					ネンンチョン ラクタンガン	1	1		川	風水	しない	-	-	鉄道の向こう側 の山	亭		感じる	ソペク山の景をもらっている。ハツカ山も意識 昔は古い松の木があり、年に一度祈りをしていたが、川の砂 が必要ということで開拓により松の木が死んでしまった。 開拓より、川の近の森をななつた 川の対岸側より、別の集落にあたるが 感覚的にはこの集落の一部として認識している	
E	テウソル里	02							0	2									感じる	この村には家がらつきがなく、ほとんど人は任んでいない	
F	サムガン里	11	カルボン山	ブドッソ	チュン フル山		ネンンチョン	2	0		住みやすいこと	川	生業	しない	-	白虎の山(ブ ドッソ)	-	昔は寺が あった	感じる	テペク山ではなく、ハツカ山に意識がある ヤンバンの村	
G	ハエ里	10																	感じない		
H	マエ里	10					ラクタンガン	11	0		先祖が造った禪補	両方	風水	する	松林	-	玄武の山	-	感じる	道路が出来たことを喜んでいる 公園部分が風水的に良い。寺がある 集落の後に風水的に有名な城(ムスンファ) 村自体に風水の趣は感じない	
I	タンチョン里	20	ヨコルチェ			王母 山			0	2									感じる		
J	トチョン里	11					ラクタンガン	2	0		山・川 人のこころ(優しい)	川	生業	する	お寺に 積んでいる石				感じる	色々なことを決めると常に太白山の事を考える。 チョンヤン山との関わりがあるとも思 う。里に道路が出来たことを二人とも喜んでいた。	
K	タクシル里	10					ベクナルリョン・ムンヌー山	1	0			川	風水	する	松の木		寺・ソオン 書院		感じない	テペク山の流れる山に囲まれていると思う 先祖は対岸を一年に二回の祈りの場所としていた	
L	チョンジョ ン里	10	デーヒョソ山				ハンビョソ ン	10	0		水・山・道路	山・両方	風水	する	松林	-	山	-	感じない	太白山の一部の白穴(コク)山の関わりがある 両日が高い。禪補でつながっている	
M	険山書院																				
N	ミホ里	30					ネンンチョン	1	2		川	川	風水	しない	-	ミホリ(宿湖)	-	-	金家	感じる	600年前に戦争の避難民(キム家)で出来た集落 ゴルフ場が出来た為、その場にあった明堂と墓を移動させた

表1 ヒアリング結果

ヒアリング結果から注目したいのは風水認知に関する項目である。認知に関しては若い世代や女性でよくわからないと回答する人も多く、「認知無」に分類したため一概に風水がないと言い切ることはできず、寧ろ一人でも風水認知があればその集落が風水に基づいているかについて強い信憑性を持つことができる。また、風水の認知がない人でも何から風水を感じるかと問うと明確に山や川と答えるので風水の存在を信じていると判断できる。観光地化していた3つの集落でもヒアリング結果に反映できていないが、実際に集落の案内看板やパンフレットに明記されているので風水集落であることに間違いはないだろう。またこの3つの集落にタクシルマウルを加えた4つの集落では電線の地中化が進んでいた。これはこの集落の住民だけでなく集落に関わる人々の景観に対する意識の表れと取れるのではないだろうか。

さらにこれらの集落にチョンジョンマウル・ドウサンソウン・シンウォルマウル・マエマウル・ミホリマウルを加えた9つでは由緒ある寺や祠堂、ヤンバンと呼ばれる豪族の家系の家など歴史的な建築物が多く存在し、保全され、景観に深みを足していた。このことからこれらの集落が古くから何らかのポワースポットとして人々の文化に影響を与える地点であったことがわかる。以上のように風水集落の住民は日常の中で風水を意識し、また景観についても自らの集落に誇りを持ち、自覚が高い集落があることも分かった。

4. 終わりに

以上のように特に得水法に関わる風水集落の景観についてまとめ、住民の風水とその景観についての意識について考察を進めた。これまでの研究とともに今後のさらなる研究の礎としたい。

【参考文献】

- 野口浩平・佐藤誠治・小林祐司・姫野由香・山口泰佑：「韓国農村集落における風水景観に関する研究 その1 一農村集落景観調査による風水と景観の関係の把握一」, 日本建築学会九州支部研究報告, No.50, 301-304, 2011.3
- 山口泰佑・佐藤誠治・小林祐司・姫野由香・野口浩平：「韓国農村集落における風水景観に関する研究 その2 一風景写真による景観分析一」, 日本建築学会九州支部研究報告, No.50, 305-308, 2011.3
- 野口浩平・佐藤誠治・姫野由香・山口泰佑：「開放型風水景観の特徴把握 一韓国農村集落における風水景観に関する研究 その3一」, 2011.9
- 山口泰佑・佐藤誠治・姫野由香・野口浩平：「閉鎖型風水景観の特徴把握 一韓国農村集落における風水景観に関する研究 その4一」, 2011.9
- 野口浩平・佐藤誠治・姫野由香・山口泰佑・樋口夏希：「風水思想の持つフラクタルな特性：韓国農村集落における風水景観に関する研究 その5」, 2012.3
- 樋口夏希・佐藤誠治・姫野由香・野口浩平・山口泰佑：「山で囲繞された韓国風水集落の景観：韓国農村集落における風水景観に関する研究 その6」, 2012.3
- 山口泰佑・佐藤誠治・姫野由香・野口浩平・樋口夏希：「盆地内の集落から見た重畳感のある景観：韓国農村集落における風水景観に関する研究 その7」, 2012.3
- 山口泰佑・佐藤誠治・姫野由香・樋口夏希：「定穴法から見た風水景観：韓国農村集落における風水景観に関する研究 その8」, 2012.9
- 樋口夏希・佐藤誠治・姫野由香・山口泰佑：「風水景観および風水思想と地形の関連に関する研究：韓国農村集落における風水景観に関する研究 その9」, 2012.9

「Google Earth」, <http://www.google.co.jp/intl/ja/earth/index.html>
「Daum」, 韓国地図サイト, <http://local.daum.net/map/index.jsp>
崔昌祚：「韓国の風水思想」, 人文書院, 1997年
村山智順：「朝鮮の風水」, 朝鮮総督府, 1931年

*1 大分大学大学院工学研究科博士前期課程
*2 大分大学工学部福祉環境工学科・教授 工学博士
*3 大分大学工学部福祉環境工学科・准教授 博士(工学)
*4 大分大学工学部福祉環境工学科・助教 博士(工学)
*5 大分大学工学部福祉環境工学科 学部生

*1 Graduate Student, Oita Univ.
*2 Professor, Dept. of Architecture, Faculty of Eng, Oita Univ., Dr.Eng
*3 Associate Professor, Dept. of Architecture, Faculty of Eng, Oita Univ., Dr.Eng
*4 Research Associate, Dept. of Architecture, Faculty of Eng, Oita Univ., Dr.Eng
*5 Undergraduate Student, Oita Univ.